

古川美術館 特別展

女流
画家

伊藤小坡の世界

～うららかなる美の巨匠～

平成24年 10月13日(土)－12月16日(日)

前期 10月13日(土)－11月11日(日) 後期 11月13日(火)－12月16日(日)

主催 公益財団法人 古川知足会 中日新聞社
協賛 野村證券株式会社 積水ハウス株式会社
後援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 スターキャット・ケーブルネットワーク株式会社
公益財団法人名古屋市文化振興事業団

ごあいさつ

特別展「女流画家 伊藤小坡の世界」を開催いたします。

伊勢・猿田彦神社の宮司の家に生れた伊藤小坡(1877～1968)は近代日本画壇で女性画家として注目された存在です。小坡は幼少より親しんだ神話・物語や、時には自身の家庭生活を窺わせるような日常の女性の断片を鮮やかに切り取り、柔らかな女性美を生み出しています。温もりと暖かさに満ちた小坡の画風は、当時としては珍しく画業と家庭を両立させたこともあって、大変注目されました。

そこで本展では、小坡の画風に少なからぬ影響を与えた家庭に注目します。前期では夫であり同じ画家でもある伊藤鷺城との合作、後期では家族の節目を祝うために生み出した作品から、女流画家・小坡を形作り芸術を支えた家庭との関わりを探ります。同時に本格的に画家として歩み始めた時の師・谷口香嶠や、鷺城作品なども交えて小坡の画業を紹介していきます。中でも長らく展示されずにいた大正期の大作「洗濯の女」は、彼女の芸術の高まりを示すものとして重要な作品です。また小坡芸術の華ともいべき美人画を一堂に展示するとともに、工芸の図案や雑誌の挿絵などの新資料も含め、彼女が描き出した、うららかなる美の世界を展覧していきます。

女性が画家として生きることが困難だった時代。芸術への情熱だけではなく家庭生活への慈しみの心を持ち、品格の中にも温もりのある美を描いて歴史に名を刻んだ稀有な女流画家の知られざる軌跡を、この機会にどうぞお楽しみください。

最後に本展開催に際しましてご協力賜りましたご関係者様、ご所蔵の方々に、この場をかりて心より御礼申し上げます。

公益財団法人 古川知足会
中日新聞社

【伊藤小坡 略歴】

伊藤小坡(明治10～昭和43 1877-1968)は、三重県宇治山田市(現・伊勢市)の猿田彦神社で代々宮司をつとめる家に生れる。本名は佐登。厳格な父の元で和漢文学の講義を受ける他、盆石、柔術などの稽古事に励む。そして父の計らいにより18歳の頃、伊勢に在住の磯部百鱗に絵の手ほどきを受ける。明治30(1897)年頃に、京都で絵の勉強をすることを決心、3年間の期限付きで上洛して森川曾文に入門、「文耕」の号をもらい京都古美術展覧会などに出品する。明治34(1901)年、曾文の没後、歴史画を志していた彼女は、四条派の幸野楳嶺門下四天王の一人で、歴史画の第一人者であった谷口香嶠に師事し、「小坡」の号を受ける。明治38(1905)年28歳で同門の伊藤鷺城と結婚。大正4(1915)年第9回文展に「製作の前」で初入選、三等賞を受賞し、新進の女流画家として一躍脚光を浴びる。その後は、自身の家庭生活の体験から生み出された日常の女性を題材とした大作を次々と発表し、素朴な画風で高い評価を得る。大正6(1917)年には、京都岡崎の公会堂にて当時の皇后陛下の御前にて揮毫を行っている。順調に文展で活躍する中、大正8(1919)年に京都での反官展団体と言われる日本自由画壇の結成に名を連ねている。参加の動機は不明だが、竹内栖鳳の勧めで翌年には帝展(旧文展)に復帰することとなる。昭和3(1928)年には栖鳳の竹杖会に入門し、女流画家の第一人者といわれた上村松園と同門になり、女流画家の先駆けとして「松園・小坡」と並び称された。栖鳳についた頃より歴史や物語の女性像を再び描くようになり、やがて歴史風俗に身を包んだ美人画を発表していく。一貫して人物を描き続け、重厚な歴史画や、小坡を一躍世間に知らしめたさりげない女性の日常を描いた作品、そして王朝や江戸期の風俗に身を包んだ美人画へと画風を変遷させながら、明治・大正・昭和の日本画壇で活躍した。

1 階展示室

■ 歴史・古典へのまなざし

故郷・伊勢から京都に出て、森川曾文、谷口香嶠に師事し、画家として歩み始めた小坡は、大正時代に女流画家の先駆けとして一躍脚光を浴びた。昭和に入ると独特のやわらかい表情を見せる美人画を描き、長い期間にわたって活躍している。そして美人画の巨匠・上村松園に次ぐ画家と評され活躍した。

小坡の画業は、初期の歴史画、大正期の日常の女性、そして大正末期からの歴史風俗の人物と、三つの時期に分けられる。そこには物語や歴史、古典と、結婚・出産を機に培われた等身大の女性への二つのまなざしがみられるが、一貫して人物を描き続け、女性の美を追求している。

数少ない明治時代の小坡の歴史画には、背景の情景などが細やかに描かれている。しかし昭和初期になって描いた歴史画は、おおらかな構図で、舞台となる情景を説明する具体的な描写は省略されている。そのかわりに主要人物をクローズアップし、その表情や手のしぐさなどの描写に、人物の心理や場面の状況を巧みに表現し、初期の絵手本などを忠実に学んだ作品とは違った魅力を見せている。また歴史画とは異なり、王朝風俗や江戸時代の風俗に身を包んだ女性を描いた作品も数多く残していく。

	作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
1	伊藤小坡 平家大宰府落	明治39(1907)年頃	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
2	伊藤小坡 納涼図	明治後期-大正初期	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館		○
3	伊藤小坡 秋好中宮図	昭和4(1929)年	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館		○
4	伊藤小坡 草紙洗小町		絹本着色	伊勢市	○	○
5	伊藤小坡 鶴ヶ岡の舞		絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
6	伊藤小坡 花見之図	大正頃	絹本着色	早稲田大学會津八一記念博物館 山内コレクション	○	
7	伊藤小坡 五節舞		絹本着色	京指物資料館	○	○
8	伊藤小坡 春野辺図	昭和30(1955)年	絹本着色	伊勢市立進修小学校		○

■ 等身大のまなざし

小坡芸術の高まりは、結婚・出産を経て得た、妻として、母としての体験が色濃く投影された大正時代の女性像に結実している。それまでの重厚な歴史画から一変、画風を変化させ、女性の華やかな美ではなく、実感のこもった等身大の女性像を描いた。結婚を機に画業が衰退していく女流画家たちがいた中で、小坡は、家庭の事情で展覧会に出品できない時があったものの、家庭あってこそその画風によって、画家としての地位を飛躍的に高めた稀な存在であろう。

	作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
9	伊藤小坡 父のあと	大正頃	絹本着色	四日市市	○	
10	伊藤小坡 父のあと(下絵)	大正頃	紙本墨画	三重県立美術館	○	○
11	伊藤小坡 はじらい	大正頃	絹本着色	三重県立美術館		○
12	伊藤小坡 制作の前(下絵)	大正4(1915)年	紙本墨画	三重県立美術館	○	○
13	伊藤小坡 つゞきもの(下絵)	大正5(1916)年	紙本墨画	三重県立美術館	○	○
14	伊藤小坡 洗濯の女	大正9-11(1920-1922)年頃	絹本着色	個人	○	○
15	伊藤小坡 母子図(下絵)	明治41(1908)年	紙本墨画	三重県立美術館	○	○
16	伊藤小坡 写生帖	大正9(1920)年	鉛筆・筆	三重県立美術館	○	○

特別展示室

結婚・出産という経験は、小坡の画風に大きな変化をもたらした。それまでの歴史画から画題を変え、日常の女性を描いた親しみやすい画風によって独自の地位を築き、関西では上村松園に次ぐ女流画家として名を馳せる。

画家としての小坡に大きな影響を与えた家庭生活は、夫が同じ谷口香嶠門の日本画家であったことも重要である。入門が一年先輩だった鷺城は、京都美術協会の会員で歴史画家として活躍しており、明治36(1903)年の第5回内国勸業博覧会で「涼風」で入選を果たしている。しかし小坡と結婚した後、昭和10年代頃より作品を公に発表することが少なくなる。代わりに小坡の作画の手伝いをし、時には背景の桜の花弁などに手を入れることもあった。膠を溶いたり絵具を渡したり、展覧会があると、鷺城が家の留守を預かるという理解ある夫だったと語られている。

小坡の画家活動を支えた夫・鷺城との合作、そして家庭生活の中で小坡が家族のために生み出した作品には、家庭と画業を両立させた稀有な女流画家の、妻として、母としての一面が見られて興味深い。

■ 小坡と鷺城【前期】

	作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
17 伊藤鷺城	牡丹の図		絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
18 伊藤鷺城・伊藤小坡	伊邪那岐伊邪那美二神之図	大正10(1921)年	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
19 伊藤鷺城・伊藤小坡	御鈴人形之図	大正8(1919)年	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
20 伊藤鷺城	猿田彦神社御造営記念之図	昭和7(1932)年	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
21 伊藤鷺城	義家武装之図		絹本着色	個人	○	
22 伊藤鷺城	武人山行図		絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	

■ 小坡～家庭へのまなざし【後期】

	作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
23 伊藤小坡	春日逍遥之図	大正15(1926)年	絹本着色	個人		○
24 伊藤小坡	万歳楽	昭和3(1928)年	絹本着色	個人		○
25 伊藤小坡	端午之節句	昭和9(1934)年	絹本着色	個人		○
26 伊藤鷺城	義家武装之図	昭和4(1929)年	絹本着色	個人		○
27 伊藤鷺城	松上之鶴	大正15(1926)年	絹本着色	個人		○
28 伊藤小坡 画	扇子 五節舞図		紙本	個人		○
29 伊藤小坡 画	鏡カバー		絹製	個人		○
30 伊藤小坡	色紙(静物、人物)		絹本着色	個人		○
31 伊藤鷺城・伊藤小坡	帛紗「高砂之図」		絹製	個人		○
32 伊藤鷺城・伊藤小坡	帛紗「岩に松竹梅」		絹製	個人		○
33 伊藤小坡	色紙「御所人形」	昭和34(1959)年	紙本色紙	個人		○

2 階展示室

■ 小坡周辺

		作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
34	谷口香嶠	實方花下避雨図		紙本着色	京都市美術館	○	
35	谷口香嶠	出町柳農婦図	大正2(1913)年頃	絹本着色	京都府総合資料館	○	
36	谷口香嶠	少婦抱琴		絹本着色	平成芸術花院	○	
37	伊藤小坡 他	色紙貼交屏風		紙本着色	元 梅屋小学校蔵 (京都市学校歴史博物館管理)	○	
38・39	伊藤小坡 図案	平安堂伯圖案集より「芥子」「あざみ」		紙本	京指物資料館	○	
40・41	伊藤小坡 図案	平安堂伯圖案集より「柘榴」「撫子」		紙本	京指物資料館		○
42	伊藤小坡 画	姫・板文庫		木	京指物資料館	○	○
43		『歴史写真』	昭和4-5 (1929-1930)年	雑誌資料	国際日本文化研究センター	○	○
44・45	伊藤小坡 挿絵	『年輪』『平安』		雑誌資料	個人		○

■ 小坡芸術の華～美人画～

大正末期から昭和にかけて、小坡は再び歴史画に取り組む。同時に王朝風俗や江戸時代の風俗に身を包んだ美人画へも筆を進めていく。小坡の後の回想に、絵を志した当初から、風景ではなく人物を描くことに興味があり、(女性の感覚を活かす)という点からも、自然と美人画へ向かうこととなったのだろう。また谷口香嶠死後、十数年の独学期を経て竹内栖鳳門へ入門、当時美人画の第一人者であった上村松園と同門となったことも、小坡の描く女性像に大きな影響を与えたと考えられる。大正末期から昭和初期の作品では、構図や女性の姿態に浮世絵学習の成果が見られる。また上半身像で、髪型や髪飾りなどに細やかな配慮が行き届いたものも多く描いていく。いずれも四季の風物を鮮やかに描き込み、季節を感じさせる華やかな女性像を展開している。晩年に近づくにつれ、女性の顔が、面長からやや下膨れの丸顔になり、幼さとあどけなさを残す小坡独特の美人画の世界を築き上げていった。

		作品名	制作年	素材技法	所蔵	前期	後期
46	伊藤小坡	花吹雪	明治後期	絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館		○
47	伊藤小坡	夏之朝		絹本着色	古川美術館	○	○
48	伊藤小坡	涼み舟		絹本着色	古川美術館	○	○
49	伊藤小坡	ひいな遊びの図	大正頃	絹本着色	平成芸術花院	○	○
50	伊藤小坡	ひいな遊びの図	昭和初期	絹本着色	古川美術館	○	○
51	伊藤小坡	美人図		絹本着色	個人		○
52	伊藤小坡	虫賣		絹本着色	古川美術館	○	○
53	伊藤小坡	桂の鮎売り		絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
54	伊藤小坡	松の内	昭和10年代	絹本着色	早稲田大学會津八一記念博物館 山内コレクション		○
55	伊藤小坡	浴後美人		絹本着色	古川美術館	○	○
56	伊藤小坡	紅葉狩		絹本着色	古川美術館	○	○
57	伊藤小坡	早春		絹本着色	早稲田大学會津八一記念博物館 山内コレクション	○	
58	伊藤小坡	春寒		絹本着色	古川美術館	○	○
59	伊藤小坡	春の雪		絹本着色	早稲田大学會津八一記念博物館 山内コレクション	○	
60	伊藤小坡	春宵	昭和17(1942)年	絹本着色	東京国立近代美術館	○	
61	伊藤小坡	観梅	昭和26(1951)年	絹本着色	神宮徴古館	○	
62	伊藤小坡	舞妓	昭和20年代	絹本着色	古川美術館	○	○
63	伊藤小坡	色紙十二ヶ月		絹本着色	猿田彦神社 伊藤小坡美術館	○	
64	伊藤小坡	元禄頃美人教示之図	昭和26(1951)年	絹本着色	三重県立美術館		○
65	伊藤小坡	山内一豊の妻	大正15(1926)	絹本着色	一般財団法人野間文化財団	○	○
66	伊藤小坡	色紙十二ヶ月図	昭和6(1931)年	絹本着色	一般財団法人野間文化財団	○	○